

平成 29 年 11 月 27 日

日本テニス学会会員 各位

第 29 回テニス学会事務局
慶應義塾大学体育研究所
村松憲・坂井利彰・稲見崇孝

抄録集の一部修正について

拝啓

皆様におかれましては益々ご健勝のことと御喜び申し上げます。先日お送りさせていただきました抄録集に下記の通り一部誤りがございました。この場を借りて、お詫び申し上げます。学会大会当日まで残り 2 週間となりました。寒い時期が続きますが、ご自愛くださいますようお願い申し上げます。当日お会いできますことを楽しみにしております。

敬具

正誤表

修正①

P12 一般研究発表ポスター発表②

9:51-9:54 演題番号 P-2-8

誤：『ライフスキルと集団凝集性から見る大学テニス部員の類型化 -潜在テニス分析によるアプローチ-』

正：『ライフスキルと集団凝集性から見る大学テニス部員の類型化 -潜在クラス分析によるアプローチ-』

修正②

P33 下段

誤：『ライフスキルと集団凝集性から見る大学テニス部員の類型化 -潜在テニス分析によるアプローチ-』

正：『ライフスキルと集団凝集性から見る大学テニス部員の類型化 -潜在クラス分析によるアプローチ-』

2日目：12月10日（日曜日）

8：45－ 受付 学会大会・テニス大会 来往舎1階エントランス

9：00－9：30 ポスター閲覧 来往舎1階ポスター発表会場

一般研究発表 ポスター発表① 座長：松本健太郎（東海学園大学） 来往舎1階ポスター発表会場

9：30－9：33 演題番号 P-2-1：

「テニスのダブルスにおけるゲーム分析－自信度の高いショットの出現頻度に着目して－」

○武田守弘（福山平成大学）

9：33－9：36 演題番号 P-2-2：

「ある大学男子テニス選手の競技力向上の過程を探る－精神面と戦術面に注目して－」

○高橋仁大（鹿屋体育大学），岡村修平（鹿屋体育大学大学院），柏木涼吾（鹿屋体育大学大学院），村上俊祐（鹿屋体育大学大学院）

9：36－9：39 演題番号 P-2-3：

「フォアハンドグラウンドストロークにおけるコースの打ち分けが打点に与える影響」

○村田宗紀（国立スポーツ科学センター）

9：39－9：42 演題番号 P-2-4：

「テニスのサービス速度と上肢・下肢パワーの関係性について」

○川上諒（大阪体育大学大学院），宮地弘太郎（大阪体育大学），梅林薫（大阪体育大学）

9：42－9：45 演題番号 P-2-5：

「大学テニス授業におけるスマートテニスセンサー使用の有効性に関する一考察

－フォアハンドストロークの上達過程から－」

○岩嶋孝夫（東京都市大学）

9：45－9：48 演題番号 P-2-6：

「スポーツファーマシストによるドーピング防止活動」

○渡邊美月（法政大学）

一般研究発表 ポスター発表② 座長：内城寛子（富士大学） 来往舎1階ポスター発表会場

9：48－9：51 演題番号 P-2-7：

「テニス国際審判員におけるストレスの検討」

○村上貴聡（東京理科大学），平田大輔（専修大学），阪田俊輔（九州大学大学院）

9：51－9：54 演題番号 P-2-8：

「ライフスキルと集団凝集性から見る大学テニス部員の類型化－潜在クラス分析によるアプローチ－」

○野沢絵梨（慶應義塾大学），大谷俊郎（慶應義塾大学）

9：54－9：57 演題番号 P-2-9：

「高齢者へのプレイステイを活用した健康増進活動に関する事例報告」

○柿田 茂（Kポイント・テニスコミュなんじゃもんじゃ）

テニス国際審判員におけるストレスの検討

○村上貴聡(東京理科大学), 平田大輔(専修大学), 阪田俊輔(九州大学大学院)

審判員の役割は試合において実際に生起する様々な事象をルールに基づいてコントロールすることであり、上手くやっても当然、少しのミスも許されないため常にストレスフルな状況に置かれている。テニス競技においても審判員は不可欠であり、公式試合ともなれば公認審判員がいなければその競技は成立しない。そこで、本研究ではテニス競技の国際審判員を対象として半構造化面接を行い、テニス国際審判員におけるストレスについて検討する。対象者は、ITF、WTA、ATPの基準に従い認定されたブロンズバッジ以上を取得している国際審判員3名であった。調査は対象者に面接の承諾を得た上で約40分のインタビューを1対1で行った。面接の内容に当たっては、①対象者の属性、②審判活動を行う上で体験している悩みごとや負担であると感じること、③ストレスによって生じる心理的・身体的反応、④ストレス対策(コーピング)について質問し、インタビュー調査を行った。また、面接の内容は録音した後に逐語化し、ストレスに関連する発言を抜き出した。内容について整理・集約した結果、「判定に関すること」「時間的負担」「対人関係」「体力的負担」「パフォーマンス(判定)の評価に関すること」などが国際審判員におけるストレスとして報告された。結果の詳細は当日発表する。

ライフスキルと集団凝集性から見る大学テニス部員の類型化 - 潜在クラス分析によるアプローチ

○野沢絵梨(慶應義塾大学), 大谷俊郎(慶應義塾大学)

技術・体力以外にテニスの競技力に影響を与える、心理的な要因としての「ライフスキル」と「集団凝集性」に着目し、ライフスキル尺度と集団凝集性尺度を使用した質問紙調査を大学体育会テニス部員541名を対象に行い、373名の回答データ(有効回収率69%)から潜在クラス分析によって部員を類型化した。その結果、部員は4つのクラスに分かれ、クラス1(24.7%)は「ライフスキル・集団凝集性共に高水準」、クラス2(31.0%)は「ライフスキルは中程度、集団凝集性は高水準」、クラス3(17.9%)は「ライフスキルは中程度、集団凝集性は低水準」、クラス4(26.4%)は「ライフスキル・集団凝集性共に低水準」という特徴を持ったクラスとなった。また共変量として投入した部員の「大学最高戦績」と「高校から大学での戦績変化」を見ると、クラス1は、「全国トップ(全国ベスト16以上)・全国出場」と「高校から大学で戦績向上」の傾向があり、クラス2は「全国トップ」の傾向があることが示唆された。さらに各クラスのライフスキル、集団凝集性の傾向を明らかにし各クラスの特徴を把握することで、クラス毎の指導方針を考察した。